

ラオス選手、日本支援で練習重ね 東京パラ目指す

2018/5/22 11:19 | 日本経済新聞 電子版

東南アジアの最も貧しい国の一つ、ラオスで、2020年の東京パラリンピック出場を目指し、日本の支援で練習を重ねる選手がいる。仏教国ラオスでは障害者は「前世での報いを受けた」などと差別され、社会参加も限られてきた。支援団体は「活躍する姿を見せることで偏見を取り除く効果もある」と期待する。

首都ビエンチャンのスタジアムの一角に、バーベルと、日本が寄贈したベンチプレス台が置かれていた。16年のリオデジャネイロ・パラリンピックにラオスから唯一出場し、パラパワーリフティング男子49キロ級で6位に入賞したピアさん（28）の練習場だ。東京大会への出場も確実視されている。



ラオス・ビエンチャンで練習するピアさん（4月6日）＝共同

ピアさんは3歳でポリオ（小児まひ）にかかり、両足が不自由に。健常者と同じ学校に通ってはいたが、家の中に引きこもりがちな生活を送っていた。「競技のおかげで出掛ける機会も増え、人生がより意味のあるものになった」と話す。

ラオスには、障害があるのは「前世で悪いことをした報い」などの迷信が残る。02年から現地で障害者スポーツ支援を行う日本の非政府組織（N G O）「アジアの障害者活動を支援する会」（A D D P）は、スポーツを通じて活躍の場を増やすことが誤解を解き、障害者の社会進出につながるとし、17年には約300人を支援した。

ピアさんは07年、母親の紹介で、政府の障害者スポーツの担当者から指導を受け競技を始め、人生が大きく変わった。当時は「仲間と、どれだけ筋肉が大きくなったかを比べるのが面白かった」と振り返る。

08年の北京パラリンピックで銅メダルを取ったラオスの選手と共に練習したことで「いつか自分もメダルを取りたい」との思いを抱いた。

パラパワーリフティングは腹筋、背筋を使用せず、あおむけに寝た姿勢から上半身の力のみでバーベルを持ち上げる競技だ。「個人競技なので自分の頑張り次第」と話すように、黙々と練習し、記録を伸ばしていった。

A D D Pは16年、ピアさんをスタッフとして雇い、生計面での不安を取り除くことで、競技に集中できる環境をつくった。日本の障害者スポーツの草分けとされる大分県別府市の社会福祉法人「太陽の家」から、男子65キロ級の日本記録保持者、城隆志さんを招き、練習方法を学ぶ場も設けた。

ピアさんは、スポーツ科学に基づいた指導が「大変役に立った」と感謝。「東京パラリンピックに出場し、ラオスについて世界の人々に伝えたい」と意気込む。
(ビエンチャン＝共同)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.